研究論文

中学生の乳幼児に対する感情と父親の実子に対する感情との関連

工　藤　恭　子

Relationship between emotions that lower secondary students have towards infants and those fathers have to their own biological children

KUDO Kyoko

Abstract: In effort to find out the‘relationship between emotions lower secondary students have towards infants and those fathers have towards their own biological child,’this author conducted a questionnaire on 308 pairs of a ninth grader and his/her father, over the time period of June?October, 2002. The ninth graders surveyed included those attending two municipal lower secondary schools of‘S’City, those in the suburbs of‘S’City, those who were children of some correspondence course students of‘N’Women’s College and those who were siblings of some students of‘S’Professional School. It was observed that those ninth graders whose fathers, at their first encounters with their own biological children (the ninth graders), felt“Thank God, you have come to this world!” or the like were significantly more likely (p = 0.000) to find infants‘lovely’than were those whose fathers did not have such a feeling. Also, those ninth graders loved by their fathers at the first encounters were significantly more likely to have strong desire to raise children. (p = 0.000) These findings suggest that it is important for a father to be ready to face his own child with a positive, loving emotion at the first encounter.

Ⅰ．緒　言

筆者は元開業助産師であり、長年地域の母子保健に携わる中で、多くの新しい家族の構築に関わってきたが、社会問題とされる「育児不安」や「児童虐待」の支援を考える時、その根源には、ただ単なる知識不足や経験不足だけでは済まされない大きな問題として、「親性の未発達」が潜んでいるように感じられる。また、子どもは乳幼児の頃から、家族を中心とした社会の中で成長･発達し、身近な親や大人をモデルとして、親になる準備をしていると言え、自己を確立しようとする中学生の時期はとても重要である。

清水は、「思春期にある男女の乳幼児に対する感情は、子どもとの接触経験や親準備教育によって著しく好転するといわれている」[1)]と述べ、全国各地で中・高生に赤ちゃんとの触れ合いを体験させる事業が試みられており、親になる準備として、「次世代を育てる青年女性の母性を涵養させることは急務であり、母親の育児を支援する父親を育てるために、青年男性の父性の涵養は欠かせない」[1)]とも述べている。また、武田は、親になる準備の問題点のひとつに、「男性の子育てからの分離と無理解」[2)]をあげている。厚生労働省の資料によると、全国の児童相談所で対応した児童虐待相談対応件数は平成15年度26,569件であったが、平成20年度42,662件[3)]と増加した。また、家村は、全国の平成15年の児童虐待において、「主たる虐待者は実母が71.4％、実父が13.7％、実父以外の父親が9.7％、実母以外の母

北海道文教大学短期大学部幼児保育学科

親3.0％、その他2.2％であった。」[4] と述べている。このような現状から、母親に対する子育て支援対策は急務を要し充実してきているが、父親に対する子育て支援は充実しているとは言い難い。

本研究のデータは古いものではあるが、父子関係の出発点とも言える実子の出生後、初対面時にどのような感情を抱くのかを明らかにし、その感情が、児が中学生になった時の親準備性にどう影響を及ぼすのかを明らかにする事は、今後の父親及び中学生に対する子育て支援を考える上でも大変意義深い視点であると考える。しかし、先行研究では、親性の発達において、児の出生時の父子関係を、「感情」の視点から研究したものが少なく、思春期の親準備性との関連を研究したものはほとんどないのが現状である。

本研究では、「中学生の乳幼児に対する感情と父親の実子に対する感情との関連」を把握する事を目的とし質問紙調査を行った。

Ⅱ．研究方法

１．調査対象者

S市内の市立中学校２校の中学３年生（男子128名、女子109名）及びS市近郊の中学３年生・N女子大学通信教育課程の全国の学生の子どもの中学３年生・S専門学校の学生の兄弟姉妹の中学３年生（男子37名、女子34名）とその親308組を対象に質問紙調査を行った。

２．調査期間

平成14年６月～10月に調査した。

３．調査方法・内容及び分析方法

筆者が作成した２種類（中学生用、父親用）の質問紙を１つの封筒（返信用の封筒２枚在中）に入れて配布、回答は全て無記名による自己式調査法とし、相談せずに回答後、それぞれの用紙を別々の封筒に入れのり付けをし、それをまとめて元の封筒に戻しのり付けして提出するよう依頼した。S市内の市立中学校２校については、担任の教諭より生徒に配布してもらい、その他の者に対しては筆者が直接配布し、回収は直接あるいは郵送にて行った。

質問紙の内容は、対象の背景（中学生の年齢、兄弟姉妹の順位、家族構成、父親の年齢、父親の兄弟姉妹の順位）、中学生の乳幼児との関わり（経験の有無及び経験が「ない」理由、関わりのきっかけ及び関わった児の時期、具体的な関わりの内容）、乳幼児に対する感情、将来の子育て願望、父親の出生後初対面時の実子に対する感情とした。統計処理には統計ソフトSPSS10.0Jを用い、分析方法はχ^2検定を行った。

４．倫理的配慮

S市内の市立中学校２校においては、調査依頼に関して学校長の承諾を得た。また、調査協力者に対し、研究の目的、協力は個人の自由意思に基づく事、得られた情報は個人を特定できないよう記号化し適切な処理を行う事、調査結果については学術研究目的以外には使用しない事を文書および口頭で説明し、同意を得た。

Ⅲ．結　果

回収数171組、一人親も含め、親子の回答がそろっている場合を有効とし、有効回答数（回答率）の内訳は男子82名（49.7％）、女子89名（62.2％）、父親166名（53.9％）であった。

１．対象の背景（表１）

中学生の年齢は14歳113名（66.1％）、15歳58名（33.9％）、平均年齢は14.3±0.47歳であった。兄弟姉妹の順位は末っ子が最も多く78名（45.6％）、次いで長子50名（29.2％）、中間子22名（12.9％）、一人っ子21名（12.3％）の順であった。家族構成は核家族が最も多く117名（68.4％）、複合家族42名（24.6％）、一人親家族５名（2.9％）、その他２名（1.2％）、無回答５名（2.9％）であった。

表１　対象の背景

		人	（%）
中学生の年齢	14 歳	113	(66.1)
	15 歳	58	(33.9)
	平均年齢　14.3 ± 0.48 歳		
家族構成	核家族	117	(68.4)
	複合家族	42	(24.6)
	一人親家族	5	(2.9)
	その他	2	(1.2)
	無回答	5	(2.9)
父親の年齢	36 ～ 57 歳		
	40 歳代	117	(70.5)
	50 歳代	32	(19.3)
	30 歳代	2	(1.2)
	無回答	5	(9.0)

父親の年齢は36 ～ 57歳で、その内訳は40歳代が最も多く117名（70.5％）、次いで50歳代32名（19.3％）、30歳代２名（1.2％）、無回答15名（9.0％）であった。

親の兄弟姉妹の順位では、末っ子が最も多く、81名（48.8％）、次いで中間子33名（19.9％）、長子32名（19.3％）、一人っ子７名（4.2％）、無回答13名（7.8％）であった。

２．中学生の乳幼児との関わり

１）経験の有無及び経験が「ない」理由

乳幼児と関わった経験が「ある」と答えた者124名（72.5％）、「ない」と答えた者47名（27.5％）であった。経験が「ない」理由（複数回答n=47）で最も多かったのは、「身近に乳幼児がいない」45名（95.7％）、「乳幼児に関心がない」４名（8.5％）、「乳幼児が嫌い」３名（6.4％）、「一緒にいても楽しくない」１名（2.1％）、その他２名（4.3％）であった。

２）関わりのきっかけ及び関わった児の時期（複数回答n=124）

最も多かったのは「親戚の子どもと関わった」79名（63.7％）、次いで「友達の弟や妹と関わった」36名（29.0％）、「近所の子どもと関わった」34名（27.4％）、「自分の弟や妹と関わった」32名（25.8％）、「両親の友達の子どもと関わった」24名（19.4％）その他９名（7.3％）であった。また、乳幼児両方と関わった者が最も多く80名（64.5％）、幼児のみ23名（18.5％）、乳児のみ16名（12.9％）、無回答５名（4.0％）であった。

３）具体的な関わりの内容（複数回答n=124）

具体的な関わりの内容で最も多かったのは、「あやしたり遊んだりした」114名（91.9％）、次いで「抱っこした」84名（67.7％）、その他、「食事を食べさせた」「服を着替えさせた」各25名（20.2％）、「ミルクを飲ませた」20名（16.1％）、「オムツを交換した」11名（8.9％）であった。

３．中学生の乳幼児に対する感情

１）具体的な関わりの経験が「ある」場合（複数回答n=124）（図１－１）

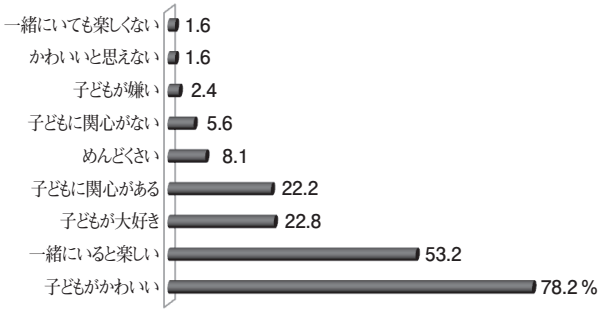

図1－1 経験が「ある」場合の乳幼児に対する感情　n=124

乳幼児に対して肯定的感情を抱いた者は、「子どもがかわいい」97名（78.2％）、「一緒にいると楽しい」66名（53.2％）、「子どもが大好き」39名（22.8％）、「子どもに関心がある」38名（22.2％）であった。その反面、「めんどくさい」10名（8.1％）、「子どもに関心がない」７名（5.6％）、「子どもが嫌い」３名（2.4％）、「かわいいと思えない」２名（1.6％）、「一緒にいても楽しくない」２名（1.6％）と否定的感情を抱く者もいた。

２）具体的な関わりの経験が「ない」場合（複数回答n=47）（図１－２）

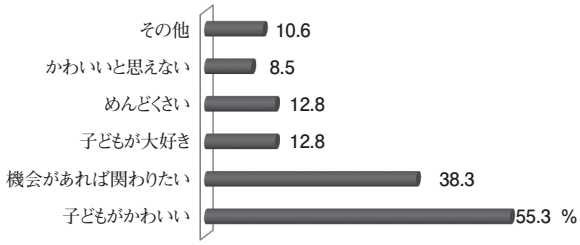

図1－2 経験が「ない」場合の乳幼児に対する感情　n=47

乳幼児に対して肯定的感情を抱いた者は、「子どもがかわいい」26名（55.3％）、「機会があれば関わりたい」18名（38.3％）、「子どもが大好き」６名（12.8％）であった。その反面、「めんどくさい」６名（12.8％）、「かわいいと思えない」４名（8.5％）と否定的感情を抱く者もおり、その他５名（10.6％）であった。

４．将来の子育て願望

乳幼児と関わった経験が「ある」場合（n=124）、「はい」と答えた者は68名（54.8％）、「いいえ」と答えた者は56名（45.2％）であった。乳幼児と関わった経験が「ない」場合（n=47）、「はい」と答えた者は26名（55.3％）、「いいえ」と答えた者は21名（44.7％）であり、経験の有無に関わらず、「はい」と答えた者が約半数いた。

５．「子どもがかわいい」という感情と乳幼児と関わった経験及び将来の子育て願望との関連（n=171）（表２）

表２「子どもがかわいい」という感情と乳幼児との関わりの経験及び将来の子育て願望との関連

人（％）

		感情を抱いた群 n＝123	感情を抱かなかった群 n＝48	p値
経験	ある	97（78.9）	27（56.3）	0.003
	ない	26（21.1）	21（43.7）	
子育て願望	はい	76（61.8）	18（37.5）	0.010
	いいえ	47（38.2）	30（62.5）	

χ^2検定

乳幼児に対する感情と乳幼児と関わった経験及び将来の子育て願望との関連をχ^2検定した結果、有意差が認められたのは「子どもがかわいい」という感情であった。

「子どもがかわいい」という感情を抱いた群と抱かなかった群を、乳幼児と関わった経験及び将来の子育て願望に関して比較し、χ^2検定した結果、「子どもがかわいい」という感情を抱いた者は乳幼児と関わった経験が「ある」者が有意に多く（p＝0.003）、将来の子育て願望が有意に強かった（p＝0.010）。

６．父親の出生後初対面時の実子に対する感情（複数回答n=166）

父親の肯定的感情で最も多かったのが、「生まれてきてくれてありがとう」94名（56.6％）、次いで「大切に育てたい」86名（51.8％）、「かわいくてしょうがない」54名（32.5％）であり、否定的な感情として、「小さすぎて可愛いとは思えない」２名（0.8％）であった。

７．「生まれてきてくれてありがとう」という感情と「子どもがかわいい」という感情及び将来の子育て願望との関連（n=166）（表３）

表3「生まれてきてくれてありがとう」という感情と「子どもがかわいい」という感情及び将来の子育て願望との関連

人（％）

		感情を抱いた群 n＝94	感情を抱かなかった群 n＝72	p値
子どもが	はい	80（85.1）	39（54.2）	0.000
かわいい	いいえ	14（14.9）	33（45.8）	
子育て願望	はい	63（67.0）	27（37.5）	0.000
	いいえ	31（33.0）	45（62.5）	

χ^2検定

父親の出生後初対面時の実子に対する感情と乳幼児に対する感情及び将来の子育て願望との関連をχ^2検定した結果、有意差が認められたのは「生まれてきてくれてありがとう」という感情であった。

「生まれてきてくれてありがとう」という感情を抱いた群と抱かなかった群を、「子どもがかわいい」という感情及び将来の子育て願望に関して比較し、χ^2検定した結果、「生まれてきてくれてありがとう」という感情を抱いた父親の中学生は、乳幼児に対して「子どもがかわいい」という感情を抱いた者が有意に多く（p=0.000）、将来の子育て願望が有意に強かった（p＝0.000）。

Ⅳ．考　察

１．中学生の乳幼児に対する感情と乳幼児と関わった経験及び将来の子育て願望との関連

金谷は、大学生に対する各発達段階での乳幼児との交流経験についてのアンケート調査において、「中学生になると近所の子どもとの交流は減り、学校の授業での意図的交流が増えている。」[5]と述べているが、本研究の対象である中学生は、意図的ではない身近な乳幼児と関わった経験が「ある」者が124名（72.5％）と多く、そのうち「親戚の子どもと関わった」者が79名（63.7％）であり、渡邉,工藤の中学生の乳幼児との接触経験に関して「よくある」「ときどきある」を合わせて半数を超えた項目は、「きょうだいや親類の子どもの世話や遊び相手をしたこと」[6]という結果と同様であった。

乳幼児と関わった経験の有無に関わらず、乳幼児に対する感情では、「子どもがかわいい」という肯定的感情を抱いた者が123名（71.9％）と最も多かったが、この肯定的感情を抱いた者は身近な乳幼児と関わった経験が「ある」者が有意に多く（p=0.003）、将来子育てをしてみたいという願望が有意に強かった（p=0.010）という結果であった。この結果は渡邉,工藤の「乳幼児との接触経験が多いと小さな子どもへの関心や、赤ちゃんを見ると抱きしめたくなる等の対児感情が肯定的で高かった。」[6]という結果と同様であった。　また、中西,牧野は、高校生の親になることへの準備状態は「感情的領域が圧倒的に重要な構成要素になっていることがわかった。」[7]また、「このことから高校生男女が将来親になるために最も必要なことは子ども好きという感情を育てることであるということができる」[7]と考察しており、本研究においても類似した結果であった。つまり、乳幼児との接触経験を通して、「子どもがかわいい」という乳幼児に対する肯定的感情をより高める事や、「子育てしてみたい」という願望を抱く事が「親準備性」を形成する要因として重要である事が示唆された。

２．父親の実子に対する感情と中学生の乳幼児に対する感情及び将来の子育て願望との関連

分娩後早期の父親の対児感情についての先行研究は、田中の調査研究[8]があるが、分娩後早期の父親の子どもに対する接近感情と出生後６カ月時の父親実感との関係を明確にする事を目的とした研究であり、「接近感情の強い父親は子どもの世話や関わりの中で、父親実感が強い傾向にあるという結果を得た。」[8]と述べており、分娩後早期の父親の対児感情が乳児との関わりに影響する事が示唆されている。

しかし、本研究のように、父親の出生後初対面時の実子に対する感情を調査した先行研究は少なく、また、その感情が中学生の乳幼児に対する感情や子育て願望等の親準備性にどう影響するかを調査した先行研究もほとんどない。佐藤は、「出産を控えた両親や乳幼児を持つ父母に対しての教育や、子育ての情報誌の発行が盛んになったが、中高生や大学生といった、親予備軍に対する教育が充実しているとはいえないと考えている。」[9]と述べている。本研究では、「生まれてきてくれてありがとう」という肯定的感情を抱いた父親の中学生は、乳幼児に対して「子どもがかわいい」という感情を抱いた者が有意に多く（p=0.000）、将来の子育て願望が有意に強かった（p＝0.000）という結果であった。つまり、父親の肯定的な対児感情を支持する事は、親予備軍に対する教育を充実させる事となり、その子が親になる時、さらに親性を充分に発達させる事につながっていくものと考える。

大日向は、「父親の育児参加は、父子関係の確立のためにも不可欠である。」[10]と述べているが、筆者も助産師として多くの出産に立会い、新しい家族の構築に関わる時、父親が児に抱く感情がその後の父子関係や父性の発達に影響を及ぼす事は経験上実感していたが、出生後初対面時の父親の対児感情が父親の親性の発達を促進させるばかり

でなく、その子どもが中学生になった時の対児感情にまで影響を及ぼし、親準備性を促進させる要因としても重要である事が示唆された。

この結果から、今後の子育て支援対策として、父親が実子と出生後初めて対面する場面において、父親が抱く感情を大切にしながら、児が誕生した事に感謝し、肯定的な対児感情が抱けるように支援する事が重要であると考える。また、父親は、その時抱いた感情を忘れずに育児する事により、乳幼児期を経て、いずれ子どもが成長・発達し思春期を迎えた時に、再度、『その感情を子どもに伝えていく事』が親子関係を構築するためには重要であると考える。

３．研究の限界と今後の課題

本研究は男女別の回答数が少なかったため、男女別に分析を行なわなかった。男子は将来父親としての役割を担い、女子は将来父親となるべき男性を伴侶として選択するという場面に遭遇するであろう。どの性別であっても、モデルになるのは父親であり、男女別の検討も意義があると思われるので、今後は調査数を増やし研究を継続したいと考える。また、乳幼児に対して「否定的感情」を示す中学生の背景及び対応についても明らかにし、研究を継続していきたいと考える。

Ⅴ．結　語

本研究では、「中学生の乳幼児に対する感情と父親の実子に対する感情との関連」を把握する目的で質問紙調査を行い、次のような結果を得た。

１．中学生で「子どもがかわいい」という感情を抱いた者は身近な乳幼児と関わった経験が「ある」者が有意に多く（p＝0.003）、将来の子育て願望が有意に強かった（p＝0.010）。

２．実子が出生後初対面時に「生まれてきてくれてありがとう」という感情を抱いた父親の中学生は、乳幼児に対して「子どもがかわいい」という感情を抱いた者が有意に多く（p=0.000）、将来の子育て願望が有意に強かった（p＝0.000）。

以上の事から、父親が実子の出生後、初対面時に肯定的感情を抱けるように親子関係を築く事は親性の発達を促進させるばかりでなく、その子どもが中学生になった時の対児感情に影響し、親準備性を促進させる要因としても重要である事が示唆された。これからも子ども達やその親が良好な親子関係を築けるよう子育て支援に関わっていきたいと考える。

謝　辞

本研究の調査に御協力頂きました皆様に深く感謝申しあげます。

（尚、本研究の要旨は第44回日本母性衛生学会学術集会にて発表したが、一部加筆・修正した。）

引用文献

１）清水凡生：赤ちゃんふれあい体験学習の効果 1. 赤ちゃんふれあい体験学習の概要―はしがきにかえて―. 小児保健研究, 2000, 59 (2), 157－158.

２）武田信子：社会で子どもを育てる　子育て支援都市トロントの発想. 東京,平凡社新書, 2008,72.

３）厚生労働省：児童相談所における児童虐待相談対応件数,2009－12－21, http://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/07/dl/h0714－1a.pdf

４）家村昭矩：北海道における児童虐待の現状, 北海道医報,2005,1043,10－17.

５）金谷有子：大学生と幼児との世代間交流の重要性についての探索的研究. 埼玉学園大学紀要, 2008,8,122.

６）渡邊彩子,工藤五月：中学生の乳幼児接触経験と保育に対する意識. 群馬大学教育学部紀要, 2003,38,209,216.

７）中西雪夫,牧野カツコ：高校生の「親になる

ことへの準備状態」と保育教育（第３報）―「準備状態」の構成要素の分析と保育教育への示唆―．日本家庭科教育学会誌,1989,32（2）,65.
８）　田中恵子：分娩後早期の父親の対児感情と出生後6カ月時の父親実感との関連．母性衛生,1999,40（1）,101.
９）佐藤洋美：乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響．日本生活体験学習学会誌,2004,4,52.
10）大日向雅美：赤ちゃんふれあい体験学習の効果5．母性・父性の涵養．小児保健研究,2000,59（2）,173.

（2010年１月７日受稿）